

---

# 探し物は何ですか？

マーヤ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

探し物はですか？

### 【著者名】

マーヤ

### 【作者名】

マーヤ

マーヤ

### 【あらすじ】

安西優里 16歳。都立高校に通う華の女子高生。

趣味は外国語、貯金、そして美形ウォッチング。

「ごくごく平凡な家庭に生まれ 「ごくごく平凡な姿をしていて頭もそこそこ 運動は中の上 ぐだぐだですが 「ごくごく普通の女の子。

普通を愛する女の子なのだが。。。。

近々 美青年にストーキングのまゝに追われる予定。。。。

将来の夢。  
平凡。

## 運命の日（前書き）

プロットなしの 勢い矛盾上等小説ですのであしからず。

## 運命の日

人は何かしら何かを求めているのだといつ。

時に、夢を

時に、幸せを

時に、愛を

しかしながら、

人生とはうまくいかないもので

人は愉快に笑う

人は涙をのむ

生きるという事は嬉しい事半分悲しい事半分なのである。

このお話は

不幸でも幸せでもどちらともいづらに平凡の少女のお話

．．．のはず。

### 探し物

安西優里は「ぐくぐく普通の女の子。

少し裕福な家庭に生まれ 上に一人の姉と兄がいる。

+ 愛犬 1匹。

母は専業主婦、父は不景気による会社の合併や倒産で今はただのスーパー雑務

今をなんとか生きている「ぐくぐく平凡の家族で生活している

「普通の女の子なのだ

決して非凡ではない。一芸もない。

くどいようだが、安西優里は凡人だ。容姿も並。頭脳も並。運動はまあよしとしよう

どたどたどた  
ばた——ん

走つてくる音が聞こえたらすぐに自分のいる教室のドアが勢い良くあけられた

「かにノートかして」

「薄ら、。。。。母國から日本へ、お出でになつたナガヒ

苦笑しつつノートを机からだし茜と呼ばれた少女に手渡す。

「ごめんって。いやでも次のクラス太田ちゃんだらー。優里

の  
命  
に  
れ  
か  
り  
や  
す  
い  
が  
は  
る  
」

上つかって耕す？

「でもでもー 優里ちゃんお手製英語ノートに学年は関係ないのよ

「ひととおりあわてて？」

ほいほい、今日の放課後  
ハイト前にケリー！ね！」  
ひらひらひらと手をかえす

安西優里 16歳。都内県立高校に通う華の女子高生。彼氏なし  
趣味は外国語、貯金

「ほんと優里外国語大好きだよね。」  
「カフエにて先ほづかつたクレープをまおばる一人

外国語！お金！ともりあがつてゐる優里に 茜はカフエの窓をさして道をあるいてゐる人をさす

「じゃ あれは？」

「キタ━━━━━？ 美形！ 美形もね うん 盛り上がるよね 見てて癒されるよね！」と 優里の目は街中をあるいてゐる美形一人組にそそがれる そんな様子をみて茜は苦笑する  
「癒されるだけ？毎度思つねんけど 付き合いたいとはおもわへんの？」

「ん――――――。 なんていうか それとこれは別つていうか」「まあ わかるけど。。。 あつ ダーリンから電話。。。 「ごめん ちょっと外すね」

と茜は席をたつ

茜を見送つて 残つたクレープをたべつつ 引き続き先ほどの美形を観察している

（ほーんと かつこいいよねー あの一人。モデルかなんかかな？？ でもK高校の制服だし あそこそういうの不歓迎だよねー。 きつとファンクラブとかあるんだろうねー あんな美形を彼氏にすると大変そう。）

漫画の読み過ぎかもだけど 集団リンチとかあつたりねー うわーー やだやだ やつぱ 美形はみてるにかぎるよね ワラ あつ クレープ食べ終えちやつた。 それに そろそろ時間だ。 美形観察してゐるひまないや 急いでバイトいかなきや。。。 遅刻しちやう

と 茜がかえつてこないが そのまま レジに残つた友人が支払いする事を伝え バイトにむかつた

街中にて

「なー 海斗。 さつきのカフエで俺らの事 眼視してゐた女の子す

げーな。あの様子じゃ瞬きしてねーんじゃねーの?すっげー俺らモ

テモテじゃん ワラ

「ン? そんな子いた?」

とスルーしていた。

どうやら全くきびいていなかつたようだ

「あのなー お前 僕より見てくれいいのに なんで そんなに女に興味ないんだよ だから 僕も あつち系?って疑われるんだよ。。」とこぬびを少したて手を口もとまでもつていいき ゲイジエスチャーをする。。。

どうやら海斗とよばれた美形2人組のうちの一人は女の子にはきょうみがないようである。

「んなことねーよ。。」

「どうだか?」

「あのな俺にだつて、好きな子ぐらり。。」

急に海斗の台詞がとまり怪しくおもつた由貴夜は、

『ん? ?』

つと、海斗の視線をたどる。。。

そこには先ほどの女の子 そう 安西優里がいた

「あつ さつきの眼視してきた女の子。。。なに?あの子がお前のこれ?」

と小指をたてる

「いや 違う。。でも そななるといいな。。」

と今までクールだった海斗はどこにもいない 恋する乙女いやいや 恋する青年がそこにいた

そんな海斗をみて あんぐりする

なにやら嫌な予感がする由貴夜は、一歩また一歩後ろにさがつて海斗から逃げようとする。。。

が

海斗は由貴夜の腕をがしつと捕まえて

「もちろん 協力してくれるな？」

とキレイな顔をしてすごんできた。。

いくら由貴夜が美形でも海斗はもっと美形なのである

「はい。。。」

美形がすごむと いやはや 般若のじくおそれしこものなのだ。。

いつもして海斗の追っかけがはじまりつとしていた

そして そのターゲットはいりぐく平凡の女子高生安西優里だった

安西優里 16歳。都内県立高校に通う華の女子高生。彼氏なし

趣味は外国語、貯金 美形ウォッチング

近々、ストーキングもどきに悩まされる予定。

そして

いつのひか 彼女の将来の夢は 平凡。 になるのだ。。

運命の田（後書き）

初です。

よんでもぐださりありがとうございます。

感想とかおくれつてくださると 大変嬉しいです！！！

プロットなしの 勢い書きなので矛盾とか一杯でてくるとおもいま  
すが

暖かく見守つてほしいです。

足音は知らなこつばかりであります

運命といつものは 気づかぬうちに廻っているものなのです。  
海斗美声年にターゲットにされ カレコレ1ヶ月・・・  
(「めんなさい いきなり月日が流れで。」)

安西優里 16歳。

ただいま趣味の貯金のためにバイト中。

「優里ちゃん 次 こっちおねがいできる?」

「あーー 先輩、 次僕んとこ先でおねがいしますよー 優里ちゃんおねがい!!」

「安西」 それおわつたら ちょっと こっち手伝ってくれ  
なにやら こっちいっぱいな安西優里 16歳 趣味外国語。

「あのー 今日からヘルプ担当じゃなくなつたので すみません。各自、自力でがんばってくださいー 本当!」めんなさいーーーい。  
では

とデスクから移動し 隣の部屋にこもり仕事を続行している

安西優里 趣味外国語は、幸運にも大企業のオフィスで簡単な翻訳  
+ 書類作成を週3でバイトしているのだ。 未だに彼女はどうしてこんな大企業で ただの高校生がバイトできているのかが謎だ  
か時給も待遇も 今後のキャリアとしても最高なので バイトをし  
続けている。

隣の部屋で一人もくもくと翻訳作業や書類作成を行つて いる優里を  
みながら

オフィスのO・またはサラーリマンたちはつぶやく  
「ほんと 真面目よねー」

「ですね。でも高校生なのにすごいですよね。」

「この前 ロシア語のことを彼女と喋っていたら あのこ英語だけじゃなくロシア語もイケるみたいで。なんか 凹みました。。。」

「でも すごいのは外国語だけなのよね。書類作成まかすと 何かしらボカやってるのよ あの子。。。」

「あつ 何気に多いですよね 高校生で あんなに必死になつてやつてるから あんま僕いえないんですけど、、、「

「私も。」

「あつ この前 電話対応で ペラペラと喋つていてすごい!つておもつたんですけど 会話をがんばって聞き取ると 仕事から脱線してたり。。。」

「あるわね。」

「そうそうー僕 ちょっと 焦りましたよー。」

「でも そのおかげで 何本か契約とれたりしたんですよね 確か。」

・

「そうね よく覚えてるわね 柏木君。」

「いやー 柏木君だけじゃなくとも みんな覚えてると思いますよ

先輩

「確かに。都ちゃんの言つ通りね。。。あの契約だけは会社においに貢献したのよね」

「そうそう」

「でー 彼女の時給あがつたんですよねー」

「ええー?僕 その会社からスカウトきたつてきましたよー。」

「ああ そういう噂もあつたわね

「「「でも たしか。。。」」

「学校や家から遠くなるから断つたのよね」

「この会社より大きな会社だったのに。。。」

「でもでも 先輩 彼女 外国語以外微妙ですよね。」

「・・・・・」

「そうなのよね。 でも 彼女、外国語は 英語 ロシア語 フラ

ソス語 イタリア語 スペイン語できるのよね だから 一度に4、

5度美味しい  
つてかんじになつてるのよね。。

卷之三

僕の前に立つ語学の先生です。どうぞよろしくお願いします。

卷之三

私は韓国語やつてみようかな?ってももましたよ。。」

「あの子、外國語好きをこえて、外國語マニアといつが。。。。

「北國の風物記」

分畫  
禾

卷之三

「あつ 漢も元こみります」

「最初はまともな理由だとおもつたんですよ 言語一つで容姿のまつたく異なる人と楽しく交流できるから素敵ですよね！」って でもどんどん 聞いていくうちに わかつてしまつたというか。。。

「なー! ? ?」

一  
彼女  
美形  
亡

あ  
「

卷之三

23

「まあ。。。苦笑

「なんといふか  
すごいですね  
彼女。。。」

「度を超えるわね」

「でも理由が不純でもあそこまで極めるのは・・・」

Γ Γ Γ . . . .

「仕事こまつりましょつかー

## 「うつ病」Q

「それでですね」

「はい。○○○」

ほとんど同僚の会話だけでしたが、彼女のバイト先での様子は理解できたと思います。

ええ そうなんです 彼女は外国語ラブなんですが 凡人故ミスがおおいのです。

で バイト帰りは 仲良しの茜に電話するのです

トルルルルル

「はいはい？ ダーリンと今頃ラブラブだったはずの茜ですか？」

「私。」

「あー 僕俺詐欺系は」遠慮しどきまーす」 プチ

トルルルルル

「茜さん ひどいですよー 切らないでくださいこよー！」

「だつて 私も今腹が立つてて 愚痴きいてる暇ないもの。」

「！？ どうかしたんですか？」

ふだん なんだかんだ愚痴に付き合つてくれる茜が 愚痴に付き合つてくれないと、いう事に驚き茜の話をきこうとする

「別れたの（怒）」

その一言でかなり同様する優里

「！！！なんで？ あんなにラブラブだったのに。。。「

「それは うちがききたいっちゅーねん。 もう ホント最悪。」

「彼氏募集中の私にとつて なんて声をかけたらいいのか わかりませんけど。。。

やけ食いで ケーキバイキングいきます？」

「そうね あんな男 こっちから願い下げやねん よっしゃ

じゃー 明日 橋本駅のケーキバイキングいこつやー」

「いいですね！ ちょっと 遠いけど いきましょー」

「まあ つもる話は 明日つちゅーことで おやすみー

ああ きこつけて 家にかかるんやでー じゃね

「はい。気をつけますね おやすみなさい。」

30分後 優里は無事帰宅

「ただいまー」

愛犬の熱い抱擁 いや タックルに少し重心をくずしながら家のなかにはいつていぐ

「おかえりー ご飯できるからねー」

「「はんなに?」

「ピザ」

母が答えるよりも 兄が素つ気なく返答する

「ああ お兄ちゃん かえってたんだ。。。」

「悪いか」

「いや だつて いつもいないじやん。」

普段なら もう少し遅く帰宅する兄、秀がいることに驚きつつもゆっくりと食卓にむかい椅子にするわる優里  
「話せば長くなる。。。」

素つ気ない兄がそういうと 話は最低一時間はかかるとこりと前回の教訓を覚えていた優里は話をスルーしたが  
後々 あのとき聞いておけば!と後悔することは 今はだまつておこつ。。。」

「あつ 秀ちゃん 今日 かつこいい一人組みたのー あれ 絶対  
ファンクラブあるわー」

「またか お前も いいかげん 美形観察なんてせずに 一人の男  
だけを観察しろよ」

と妹の美形好きに難色をしめしつつも 反応をたのしんでいる

「てか たしか 秀ちゃんのまわりって かつこいい人おおいよね  
ー」

「類は友をよぶんだよ」

その一言に優里は 食事が喉につまりそうになつた

「…… ッホン ンンン。。。 [冗談きつこよ。。。」

「・・・・・」

「秀ちゃん 全然かつこよくないから」

(ガーネン)

何気に凹む兄 秀であった

凹んでいる兄をよそに 優里はたんたんと食事をおえ 教育番組の語学講座を見終わると部屋にもどり宿題をしてねたのであった。。。

何気に凹んでいる秀に おいつちをかけるよつこ

中学時代の友人 今は 別の高校にかよつている由貴夜からの電話に兄 秀は睡眠不足になつたのだ。。。

『おい 秀 きいてくれよーーー』

電話越しで鳴き声で助けをもとめよつとする由貴夜

「なんだよ。。。

『さつき いつた海斗のことだよー』

「またか。。。

そう 由貴夜は食事前に海斗の恋愛事情のことについてだうだ話をきかされていたのだ

『あいつ まじこえーよー あの女の子まじ かわいそうだし 犯罪一歩すれすれなきがする』

「今度はなんだよ。。」

『あいつ なかなか 子猫ちゃんがみつからないからって どんどん機嫌がわるくなつて クラスじや 登校拒否するやつもでてきて。。。 担任は見て見ぬ振り んで！ 親友の俺に なんとかしろとかうだうだうだうだ かくかくしかじか。。。』

由貴夜がしゃべりだして かれこれ2時間

「わかつた つまるところ なんも手がかりない状態に海斗くんとやらは平常心をたもてないと」

『まあ んなところ。。。』

「ひとつこいつていいか。。。？」

『ん?』

「俺は海斗とこいつやつとは無縁だ！ 無関係だ！ 頼むから 俺の睡眠時間をへらすんじゃね————!!!!!!」 怒

『おま！ 大親友をみするのか！』

「大親友なら 俺のことも考えて 電話しろ 每日毎日うだうだ2時間はしゃべりやがって」

そうなのだ

由貴夜はなんだかんだ 毎日電話しているのだ 最低2時間

1ヶ月はそんな状況で さすがに 温厚な秀も堪え難く。。。

「一度と海斗とこいつのことで電話すんじゃね————!!」 プツ。

そのままベッドに眠りについた秀とは 裏腹に

由貴夜はといふと。。。

電話からきこえる プーップーップーップーという機械音に絶望をかんじていた

「まじかよ。。。俺 まじで海斗の親友やめて—— 泣」

彼の悲鳴は 静かな夜に ただただ むなしく響いただけでした。

。

「ところで 由貴夜君。彼女のがかりかなにかつかんだかな？」

と 二二二二笑う海斗に 顔をひきつりながらも答える

「そもそも俺だって あのときの彼女 よく覚えてないんだから。。。学校だってわかんねーし···」と続けよつとしたが

「（二二二二二二二）」

海斗の明らか裏のある笑顔に 泣きそうになる由貴夜。

（俺、 、 、 なんで こんなやつの親友なんかやつてんだろ（ひろ））  
と ただただ おもつて いるの でした

そして 海斗の笑顔に耐えられなくなつた由貴夜は でたらめ情報  
をあびせるの でした

「あつ 明日・・

「明日? がどうかしたのか?」

「放課後に橋本駅にいけばあえるかもしれない」

「本当か! ! ! !

いきなり田の色がかわった海斗に

由貴夜は 胃がきりきりするなか ただ

「ああ 運が良ければあえるんじやね?」

とこうことしかできなかつた。 。 。

「そうか」

「俺 はじめて 学校やめてえよ。 。 」

その由貴夜の一言に

（（（（（すまん 由貴夜 でも 頼むから学校をやめないで  
くれ 費はお前一人だけでじゅうぶんだ! ! ! ） ） ） ） ）

クラスメート一同は ただ 無言で涙をのんだのだ・・・

足音は知りなこつひがひかるこたす（後書き）

えと まだ 海斗と優里はであります  
次に 海斗は優里を発見し おつかけがはじまるどおもこます  
てか 本当 文章ばらばら でたらめ 適当でいめんなぞ  
おもいつきのままに書こてるの。。。  
でも 楽しんで読んでくれていたなら幸いです

引き続き応援よろしくおねがいします

## 人生が変わらうとする日

学校帰り 2人組の女子高生がカフェでまたり会話する。

「くありふれた日常の一枚マである。

「で、なんでふられたんですか? いつもなら振るほうなのに。。。

「ケーキを食べながら仲のいい一つ上の先輩 茜に訪ねる

「つむじまだ よくわかつてないねん

とポツポツと電話での状況を話し始める

「ほんまに いつものように電話しどってん 一樹と。。。

と語り始めた。。

ああ 一樹つていうんは つちの愛しの彼氏な 今じゃ元カレや  
ねんけど。。。

一樹は ほんまいに男やねん あそこにあるイケメンみたいに と

と茜が指をさした方向には 一の前の美形二人組の一人がいた

(あつ 1Jの前の美形A・・・)

優里はケーキを食べながら 茜のやした男を見た

じつせ自分のこととは思わないだらつ こつもみたいに 美形Aをみながら手をふつてみた

反応はないだらつとおもつてるので 茜の回想話に集中する

「でもー 一樹がいきなり だまつこんださ なんや? つねむつて 話をきこしていへりけにな

あいつ こんなことこうねん 『僕、茜わいやんの』と大好きだよ 本当に大好きだけど でもやつぱ

自分の身がかわいいんだよー』めんだけど ちよつとの間距離を置こう いや ちょっとの間だけ 別れてしまふ』って。。 意味わからんやろ?』

なんていう身勝手な男なのか。。。優里はあきれた

「意味わかりませんね その男。 といつか むしろ そんな男とは別れてしまえ! ! ! 」

「と思つやろ でも やつぱ好きやねんつて。。。」

「。。。。別に 茜さん がそれでいいなんですかね？」  
理由をいたんですか？」

「なんとかな。じゃあ 一言でいふと 学校の王子が 一回惚れして片思心中やから 幸せにはなつたらあかんのやつでさ・・・」

学校の王子が片思心中

えー つまり、学校で一番人気な たぶん崇拜されてるような人が身をさくような片思心をしていふと?

・・・

「何ですか それ。。。別に 関係ないと思ひなんですかね？」

「普通は そうおもひやう一でも 違ひらじい。。。一樹がK高校つてしまふやう?

なんや K高校の王子はものすこ美形で 影響力があるやうこねん・・・」

・」

またもや説明しつつかたりはじめた茜さん

へーへーへー 3へーでじゅうぶんだ!

要約すると

王子の片思心が成就するまでは まわりがどばつちつをへりつと

なんといふはた迷惑なわがまま王子なんだろ？

話を聞く限り

茜さんの元彼も協力してゐるつていう話だし。。。

なんでも一番の犠牲者は 斎藤先輩といふらしー。。。

この先輩もかつこいらしーが 別に 自分のしつたことではない。

なにせ 美形と自分は別世界の人間なのだから。。。

優里と茜が喋つてゐる間

外では。。。

海斗のテンションに苦笑しつつ ついていけない由貴夜がいた

「由貴夜！――ありがとう！一ヶ月かかって やつと彼女と再会で  
きた」

いや まだ 再会してないだろ。。。 ただ発見しただけだろ？  
。。

と 由貴夜がそんなことおもつてるとほしらず ただ一人暴走しあ  
じめている海斗

「ああ！今彼女手をふったねあれはさつと僕に手をふつてくれたんだよね！」

いやいやいや 気のせいだらつお互に知り合つじゃねーの。。

「ああ 今日はなんて最高な一日なんだらつ」

と海斗は一人の世界にはじりこむのでした

はん？最高の一曰だと！さつきまでは俺の胸に穴をあけるのかといいうぐらじピリピリさせていたくせに。。子猫ちゃんを見た瞬間 なんなんだよ このかわりようは。。いや でも 今日あの子猫ちゃんがこの駅にきてくれて ほんとよかつた。。。涙

それにしてあの子猫ちゃん ビーーーつかで見た事あるんだよな。いや きのせいか？

と一人考え方をしてくる由貴夜をよそに 海斗はまたに今、暴走しよつとしていた

その瞬間

運命はまわつたのだ！。。

気づいたときには おそかつた

後に由貴夜はそつ語る

ガシッと 女の子の腕をつかみ ひきとめる

「…………？？？？ あの なんですか？」

いきなり腕をつかまれ驚き 反抗しようとした振り返った  
そこには美形Aがいたのだ すこしひラッシュキーとか思つたのは優里  
だけではないだろつ

茜も あつ 美形！と 心のなかで少しもひいたのだから。。。

「あの。。。。」

「一回一回した美形Aにとまどいつつも といかげると

といわうに2倍の笑顔で返事をしてきたのだ

「はい。」

が はいの一言

会話が続くはずもなく。。。

しかし 男の手はゆるむじにか少し強く優里の腕をつかんでいる

若干痛いのか 優里は顔をしかめるが 美形Aは一回一回したまん  
まだ

「あの 痛いので手はなしてもいいですか？」

やつと美形Aは手をはなしたかとももえれば 今度は 手を握りしめ  
てきたのだ。。。

「 「 」 」 」 」 」 」 」 」 」 」 」

男の意味不明な行動に優里と茜は焦り始めてくる

「あの？」

と根気づよく問い合わせる 優里 曲がりなつにも田の前の男は優里の大好きな美形。。。

「あなたの名前は？」

いきなりまともな会話がはじまるのかー?とおもい しぶしぶ眞面目に答える優里

「優里ですけど。。。。かくいうあなたは?」

「優里さん。。。素敵な名前ですね 僕は東城海斗です K高校3年のオックスフォード進学予定です。優里さんは制服をみるかぎり乙学園の生徒ですよね。 ここから遠いですけど このくんにすんでるんですか?」

「え? こや一市に住んでますけど」

「ああああー 僕と同じですね やはり運命かんじます」

運命かんじます! その一言で なにやらこい予感がしない優里は茜とアイコンタクトをとる

その場をさりとしたりしたが 未だに海斗といつ美形Aは優里の手をに

ぎつたままなのだ

しかも 恋人つなぎ。。。

田の前にいる美形の言葉をなんとかして止めようとしたが遅かった  
そのきれいな顔から発せられたのは なんと 愛の告白だった

「あの 僕と付き合ってくれませんかー!??」

安西優里 16歳 初めての告白に動搖し 固まってしまう頭が真っ白になつた優里に  
海斗は勝手に アドレス交換をはじめ 学校に迎えにいってデート  
しましよう など  
どんどん語りかけ 時間なので失礼しますね 明日あいましょうね  
といい去つていった

呆然とする優里に

茜は「おつかれ」というのでした

茜にひきづられ 優里はなんとか家に帰宅したのでした

「おかえり 優里」

「秀ちゃん。。。今日待ち端で美形に告白された

「へー よかつたじゃないか で 付き合ひの?」

「いや なんか あの美形と付き合ひ大変な」」となりそうだから付合わないとおもつた。」

「ナビ?」

「いや なんでもない」

「まあ なんでもないならいにナビ 優里 お前 なんだかんだ地味な男がすきだもんなまあ がんばれー」

「んー」

そして その日の夜中

由貴夜からの電話

『秀! やつと 子猫ちゃんみつかって 僕 僕 僕 あの地獄から抜け出せるとと思うと幸せだよ』  
と涙声で電話がかかってきたのだ  
「そうか よかつたじゃないか」  
『いや ほんと なんだかんだ1ヶ月すまんな』  
「別に かまわ」  
『まああの子猫ちゃんには悪いけど あの馬鹿の相手になつてもうう。』

「あつ お前 妹いたよな あの馬鹿みたいな変な男にひつかからないよつ氣をつけるよつことけよー』

「あ じゃな 僕ねるわ

『すまんな またな』

まあ 気をつけるよつこつたといいで 妹には関係ないだろつな。

。 いつももいながら 秀は眠りにおちるのでした

## 人生が変わらうとする日々（後書き）

はい

よんでもぐださつて ありがとうございます  
プロット無しの 修正なしの一回書きの話 3つめです  
何度もいいますが 矛盾上等 自己満足のお話なので、 、  
それでも 楽しんでくださると嬉しい限りです

『good morning my sweet? 昨日は楽しかったよ  
今日も楽しみにしてる。学校まで迎えにこつか? それとも駅で待ち合わせ?』

僕の優里はどうこいくたい? ? ? ?』

優里は朝から届いたメールに固まってしまった

そうだ。

昨日 あれよあれよと 勝手にアドレス交換されたんだ。。。。

学校にて、

「あーーーっはっはっはっはーーー ひいひい ウケる」

2-Aの教室にて 3Bの生徒茜が爆笑している

「僕の優里。 つづ」

「my sweet? つづて いやいやいや

「送迎ありのメール。。。どんなだけやねん。。。あの美形。あはは  
は」

茜は一人爆笑している

「西さん……笑えないよ。まじで」

「まあ、当事者からするとね。。。仕方ない。でも優里の好きな  
美形じやん  
いいじやんいいじやん

「よくないよ！メールはこれだけじゃないんですよ！」  
事だしてないんです

た  
の  
に

優里は西に今日午前中だけで愛信したメールをみせる

111

卷之二

卷之十

工藤每斗

工藤海斗

•  
•  
•

•  
•  
•

•  
•  
•

•  
•  
•

•  
•  
•

•  
•  
•

工藤海斗

秀ちゃん

工藤海斗

工藤海斗

工藤治三

「うわ。。。工藤海斗ばつか。。。」

顔がひきつる茜

クラスメートの友人も ドン引きしている

「で内容が・・・

『どうしたの?忙しいの?』

『調子でも悪い?』

『ああ そうだ 今日僕の友人とWデータしよう!いいだろ?』

『いや 無理だつたらいいんだ』

『昨日一緒にいた友人もつれてきていいよ』

『優里の友達は僕の友人だからね』

『おーーい?僕の優里?返事ほしいな』

『今 何してる?僕は大学に送るエッセイを書いているよ』

『ああ 今日4時に駅でいいかい?』

『もしかして 迎えにきてほしいのかい?』

『いいよ 何も言わなくてもわかるよ 迎えにいくよ 学校の正

門でまつてるよ僕の優里』

etc . . .

「1通もおくつてないのよ！ 僕の優里つて いつからこここの所有者になつたの！ つてはなし

「ちゅうと やばくない？？？？？？？」

メールの内容にクラスにいた人全員 顔をひきつらせていた

「優里。。。 私 教室帰るわ。。。 うん あ！ 今日一人で帰つて  
な！ うかうよつと用事あんねん。  
。。」と 逃げるよつこさつてこつた茜

「ねえ。。。 委員長。。。 小島君 ついひりちゃん どうひこみへ。 ど  
うすればいい？？？」

「あーーー 女医さん とりあえずシカトし続けるとか？」

「委員長。。。 昨日からずーっとシカトし続けてるんですけど」

「いや ほりや リンゴ病かもしけねーぜ？ 熱しやすく冷めやす  
つてやつ。。。」

「小島君 秀ちゃん あつお兄ちゃんなんだけど。。。 秀ちゃんの

周りって美形多いのね

その人たちの恋愛の話をきくかぎり 骨の髄まで彼女は愛されるよね。。。たまにメールするんだけど 大変そうなのよね 浮気のつ もないらしい。

「えーっと 優里・・・。御愁傷様???? でも 美形でしょ? K高校だけ?

「じゃあ 周りがほっとかないんじゃない?深く考えちゃ駄目よ

「そうよね 美形でK高校なら 周りがほっとかないよね ええ」

少しポジティブになつたところで 優里は次の授業の準備に口々力一へとむかつた

優里のいないところで

「たしか 小島君K高付属出身よね じゃあ 工藤海斗つてしまつるんじゃない?」

「しつてるビコロか 有名すぎるんだよ。K高校の王子だぜ?そつときは何もいわなかつたけど

の人 ホモじゃないのかつて噂だつたし あつ でも 親友の由貴夜さん曰く違うらしいけど

「王子?別人じゃなくて?」

「あつ 僕もその話しつてますよ Ｋ高校の王子はカリスマ性がなんとかで」

「そうそう 僕 なんだかんだ憧れてたからな。。。」

「でもメールの工藤海斗じや。。。」

「まつ 別人だよな？」

「だといいね うん」

「でも モノホンならやべーかもな

「なんで??？」

「さうだよ 何がやばいのせ?・小島君

「いや Ｋ高校の生徒ってさ まあ ハリートだらけで人間不信が若干あるわけよ

なんだかんだ金持ちの子息ばつかだし? でまー 一度懐にいれる  
と。。。言わざともな

「「「・・・・・・・やばいじやん」」

「ストーカー対策のなんか渡すべきか?」

「さうだな 今日 ハンヅにいくか。。。」

「今日 早退しようかなー」  
と 今日の放課後をいかに避けようかを必死に考えていた

## 衝撃（後書き）

はいはいはい プロットなしの自己満足小説第4弾  
楽しんでいただけたでしょうか？

文章能力にかんしては 言わずともな。。。 といふことで  
内容を 何があったかとかを 脳内変換でたのしんでくれたらなと。  
。。。

はい

次もよろしくおねがいします

## 5 (前書き)

いつもプロットなしの場当たり小説～～～

じ――――――。

カタカタカタ

じ――――――。

カタカタカタカタカタ

じ――――――。

カタカタカタカタカタカタカタ

(先輩 あそこ すごいっすね)

(後輩よ。私らはなにもみていない)

(そう 私らは何も聞いてもない)

(そうよ 先輩 何もいってもいけないわ)

「あのー。上藤さん」

「海斗ってよんじゃ」

「こやこや工藤さん 私バイト中なんですね」

「こりこりみるみる だから 今まつてるんだよね」

「こやこや。関係者じゃないですね？」

「僕？」の取引先の会社の社長の息子。無関係とはいいがたいかな？」

「いやいやいやいやいや。そんな人がいると 他のかたに迷惑かかるでしょ」

「そう。じゃあ はやく仕事終わらして、一時間でいいから 万事

解決！」

「こやこやこやこやこや。私も事情とこつものがですね・・・」

「

「僕彼氏だよね？ 何か問題でも？」

「いや だか、う・・・」

「ひつ 照れちやつて 優里は恥ずかしがりやなんだからー」

「（もう死ねよ）マイシ。。。（」

仕事上がり。。。

「さつ 今からアートだね！ 僕の家にでもこいつてみるかー！？？」

「ないよ。ほんと。普通に実家直行だから ばいばい」

「おへつじへよっ。」

「いや 大丈夫。 秀ちゃんが迎えてくれるから

・・・

・・・

・・・

「秀ちゃん？？」

「そつ 秀ちゃん。」

「僕とこいつものがありながら 男？」

「いや とこいつか うちら 付き合つてないよね？」

「…… 僕の妻になつてください。」

「いつものそこかよ！ ひくし。」

(てか ほんと 何? まじ むりなんだけど・・・)

## 5 (後書き)

中途半端にあげちゃいます  
ごめんなさい。

## 兄視点。ネタばれ注意。

俺の妹は中の上な外見をして  
性格は普通、成績も普通  
ごくごく普通の女の子だ

ただ あいつは 外国語習得が異様にすごい。  
俺の成績は正直悪くない むしろ上位に組み込むほどだ  
しかし 妹の英語だけはかなわない。  
学校での英語論弁大会も、クラスの英語の課題もいつも妹にやらし  
ている

俺が出来ないわけじゃない。 妹が好き好んでやるんだ  
別に 俺が頼んでいるわけじゃ。。。。

まあ そんな 俺の話はおいといて

由貴夜の忠告を真に受けなかつた俺が悪いのか  
妹の悪運を恨むべきなのか  
俺にはわからない

しかし

K高校のカリスマ王子ともいわれる男 工藤海斗が まさかの妹に  
ぞつこん。

いや 人様の恋路を馬鹿にするわけではないんだ  
だがな

自分の平穀に少しでも邪魔がはいるのだったら まー なんという  
か 考える

由貴夜にいったところで あいつは 工藤海斗のあしだ  
(そういったら この前 愚痴を永遠ときかされたが・・・)

とりあえず

工藤海斗には困っている。

なぜって？

俺と妹は 珍しく大変仲がいい。  
何があるたびに

妹は

「秀ちゃん…………」

と泣きついてくるのだ そして たいてい その場に工藤海斗もいる  
俺と妹は怪しい関係ではないのだ  
ただ 珍しく 仲がいいんだ いいだけなのに  
毎回 妹が泣きついて抱きついてくるたび  
工藤海斗の田が すごいことになっている  
そして シックスセンスなんてもの存在しないが  
その なんていうのだ？ あいつの後ろから 黒いオーラのような  
ものが。。。

正直 今では まあ 慣れたが 慣れた今でも正直つらいものがあるが

とりあえず このカップルはトラブルメーカーなのだ 俺にとつて。  
かわいい妹のため と一度だけ 破局させようと努力したが そんな努力 するべきではなかった

俺の友人達を味方にひきいれ やつは 俺に対抗してきたのだ。  
工藤海斗はどうでもいいとして

親友から 色々いわれるのは 少しな  
まあ付き合つ付き合わないは 本人達にまかそ  
( そう促すと妹は 裏切り者ー といって1週間弁当つくりってくれ  
なかつた )

まあ 今

いつもの状況に陥っているわけだ

妹と工藤海斗はこの前 ようやく付き合い始めたのだ  
ようやく。。。

妹は あれは ちがうのー などとぼそいでいるが もつ ビリで  
もいい

いやいや 話を戻そう

つで なにがあつたか それは 妹の進学先だ。  
妹はフランスかイタリアの大学にいきたいそうだ。  
そして 願書もだし 合格通知も届いた。  
しかし 身に覚えのない合格通知も届いたらし  
いどこかって?

言わずともな

工藤海斗の通う オックスフォードから。

世界屈指の大学だろう? 親が感激して さつさと手続きませ  
本来 妹のいきたい大学ではなく 工藤海斗の『ごりおし』 というか  
勝手で妹の進学先がイギリスにかわってしまって  
いま そのことにたいして 僕にぐちぐちいっていきたのだ  
正直 妹がフランスかイタリアの大学にいきたいといった理由が理  
由だから 正直どうでもいい。

もう むしろ 迷惑かかりまくっているので  
さつさと海外にでもどこでもいってくれとおもう  
日本にもどつてこないでほしい  
それほどまで 僕は迷惑を被っているのだ

だから 『そつ』といつてやつたのを  
「もう諦めて嫁にでもいけばいいのに」  
じゃー 二人とも地獄耳で  
速攻 二人が同じタイミングで  
「そうだね いきますもで籍をいれようかー」

「秀ちゃん！？そんな冗談やめて 私に不自由な生活を未来をおくらせての？」

「息そろつてしまー 仲がいいことで」

「やうなんだよ」「ちがつ……」

もう このやりとりにも いい加減飽きてきた

とにかく このカップル いや どうせ 妹が大学卒業するまでには籍いれて

そして 大学卒業したころには 子供とかできてそつだな  
いや あるいは 監禁状態な生活を強いられてそつだな  
そう妹に笑つていつたら

秀ちゃんそれ 笑えない。

と顔を真っ青にして 僕の部屋からでていった

（数年後）

妹が大学を卒業する1年前に 入籍の知らせが届いた  
これには 妹に同情したな

なぜつて？

大学のサークルで仲良くなつた男友達に嫉妬したやつが 責めに責

めて

入籍せざるおえなかつたらしい

いや 妹は大学休学しても やつから逃げたらしい

が ここは やはり天下の工藤様。世界を牛耳る工藤家にとって

赤子をひねるまでもなく

簡単に 妹をみつけだし

妹は逃げ切れなかつたらしい

俺の予測どおりだなと 笑つていうと

妹に睨まれた

ここまではいい

しかし

同じ年である 工藤海斗に

「お義兄さん」

といわれた瞬間 僕は 笑えない状況に自分もいるのだと きづいてしまつた。。。 きづい

妹よ。

なぜあやつに捕まつた!?

俺だつて 平凡の未来がほしいんだぞ! ! ! !

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4250/>

---

探し物は何ですか？

2011年11月26日19時46分発行